

教育

2011年8月27日(土)朝刊より 五感すませて音と遊ぶ

「ロバの学校」主宰 松本雅隆さん(58)

「クリンコリリンは作り次第でいろんな音が出ます」と見本を見せる雅隆さん＝長野県小諸市の「読書の森」、高波淳撮影



夏 花も 先生 公開授業

♪やまのむこうになががある
やまのむこうに飛行場がある
飛行場のむこうになががある
飛行場のむこうに雲がある……♪

木々に囲まれた広場に歌声が響く。「むこうにある」風景を想像し、子どもたちが歌い継いでいく。伴奏は足踏みオルガンと中世のめずらしい古楽器。そではロバやヤギが聴き入っていた。

毎年、夏の3泊4日だけ開く創造学校「ロバの学校」。

教える人と教えられる人ではなく「大きな人間」と「小さな人間」がともに音を探し、音をつくり、音遊ぶという

テーマで32年続いている。今年も小学生から大学生、親子まで40人が長野県小諸市「読書の森」に集まった。

初日はコンサート。2、3日目は歌や踊り、楽器作りで音を探す。最後の夜は自作の衣装で、作った楽器を奏でる「ガランピー祭り」だ。



「ふだん眠っている五感をめいっばい働かせたい。そこからクリエイティブなものを生み出すんです」と主宰の松本さん。NHKテレビなどでおなじみの古楽器の演奏家で、「雅隆さん」と慕われている。ルネサンス音楽を演奏する「カテリーナ古楽合奏団」を率い、1982年には「ロバの音楽座」を作った。

東京都立川市を拠点に、全国の子どもたちに古楽器や独自の空想楽器で音楽の夢を届けている。

朝6時、雅隆さんのバグパイプが鳴った。起床の合図。北欧の木ラッパが鳴ったら、広場に集合だ。

「夏の朝の音楽に耳をすませましょう」。目を閉じ、虫の声、風や木の音など、自然の音楽を楽しむ。

朝の踊りは、音楽に合わせた雲の上のつもりで歩いたり、鳥になったつもりで飛んでみたり。朝食を食べたら、空想楽器づくりの時間だ。作ったのは「クリンコリリン」。木の枠に取り付けた竹やアルミの板をはじいてピンピンと音を出す。まずは外枠を作り、アルミ缶で作った板や竹の板をつける。続いて思

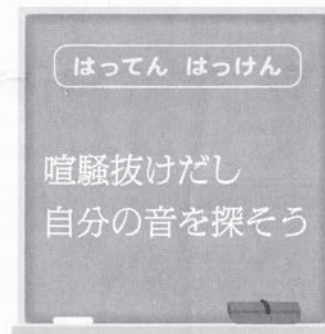
い思いの飾りをほどこした。

「見て、私はモミガランドなの」。ポンドでもみ殻が一面につけてある。森の近くでもみ殻を拾ってきたのだ。ほかの男の子はペットボトルのふたに小石を入れて音が鳴るようにした。アルミ缶を利用し、様々な音が出るしかけを工夫する子もいる。

作りながら歌を口ずさむ子が自然に増える。飽きたらロバと遊んだり、カエルやコオロギを捕まえたり。時に追い立てられることはない。作っては休憩、作っては歌う。食事の前、親子でリコーダーを合奏したいという声があがった。海外のバレエ学校に通う子も、踊りを舞う。自分をどう表現しても認められる雰囲気があるのだ。



2日ばかりでようやく楽器が出来上がった。「では、楽器を森の中へ持っていき、木に音を聞かせて、感想を聞いてきてください」と雅隆さん。それぞれが森の中へ。♪クリンコリリン クリンコリリン……♪



いつも最初に、中世の南フランスの吟遊詩人が作った「ロバの詩」を歌います。ロバ君が、大好物の夢を見てうれしくなって歌うと、その下手な歌声がすべての人を優しく包んだという歌詞です。下手な歌なのに優しくする。不思議でしょ。どんな音でも、夢みる歌声は人を優しくできる。これが原点です。

「ロバのおと」は、卓越した音でも有名な人をまねた音でもない。子どもとともに空想し、懐かしい音を探すのが「ロ

バの学校」であり、「ロバの音楽座」なのです。

昨年一枚の板を絵に見立て、カリンバという楽器に似た「絵のような楽器」を作りました。その前年は板に丈夫な糸をはったギターのような「イタル」、その前は板にたくさんのくぎを打って石ころやビー玉を転がして音を鳴らす「森のオルゴール」を作りました。子どもたちだけでなく、大人もたまには喧騒から抜け出し、耳をすませ、自分の音を見つけてみてはどうでしょうか。(談)

来週の朝日小学生新聞

新しい学習指導要領で言語活動の充実がうたわれていることから、学校で新聞を作る活動が見直されています。学校行事や地域の話題など、子どもたちの目線に伝えたいニュースを紹介するのが魅力のようです。

朝日小学生新聞は、学校新聞コンクールを実施しています。今年度で41回目。記事やレイアウトに工夫を凝らした作品が集まっています。

毎月、入選作2点を紙面で紹介(8月は30日付)、年度末にその中から優秀な作品を表彰します。次回の締め切りは9月15日。詳しくは朝日小学生新聞社のウェブサイト<http://www.asagaku.com/>を見てください。